

## はしがき

本書の目的は、高校教育システムの境界に位置する定時制高校において生徒たちを包摂することがいかにして行われてきたのかを検討することである。とりわけ、本書では包摂実践それ自体ではなく、実践を具体的に方向づける「方針」が、いかにして学校現場で組み立てられたのか、またどのように変遷したのかというところに目を向ける。本書の最大の特徴はここにある。

本書で、「包摂」というときには、中学校を卒業した人びとを高校教育に余さず取り込もうとするような状況をイメージしている。特に高校教育から「排除」されるリスクを抱える生徒たちをどのように「包摂」しようとしてきたのかに焦点を当て、その事例として定時制高校に注目する。

後述するように、定時制高校には、不登校や中退の経験など困難を抱える生徒が多く在籍する傾向があり、学校や教師は彼らが排除されないよう「包摂」することを求められてきた。定時制高校は高校教育にアクセスできるか否かの位置にいる人びとを受け止める教育システムの「境界」にあると見てよい。そこでの具体的な働きかけは、授業の内容をわかりやすく改善していくことなど教育実践の範疇で直接的に行われることもあれば、学校生活の意義について述べられた生徒向けの文集を配布して学校生活のモデルを提示していくというように教育実践によらない非直接的なやり方もありうる。このように、さまざまなかたちで試みられた「包摂」がどのような方針ないし方向性を内包していたのかということにこだわって、本書の検討は進められる。

この点にこだわるのは、「包摂」実践そのものを検討しただけでは見え

てこない、教師のリアリティ（社会的現実）を視野に入れることを目指しているからである。いいかえれば、筆者は、学校現場についての教師の解釈にアプローチすることで、はじめて彼らの「包摂」が何を指しているものであったのかを明らかにできると考えている。上記の意図のもと、本書では現場でのフィールドワークではなく、教師の研究会誌や生徒の文集等のテキスト資料や教員 OB へのインタビューによって得られたナラティブなど、語られたものを分析対象としている。この点は、本書のもう一つの特徴である。

このことからわかるように、本書は、定時制高校での「包摂」の成功例を示すことや定時制高校の困難さを強調することを企図しているわけではない。そうではなく、上で述べた作業を通じて定時制高校での「包摂」がいかんして可能になっていったといえるのかを把握することを目指している。本書の中心はこの点に置かれるが、分析をふまえたうえで、高校教育システムにおける「包摂」というトピックについてどのように向き合っていく必要があるのかという点についても若干の問題提起をしたいと考えている。

本書は定時制高校を主題とする学術書である。だが、内容を見ればすぐにおわかりいただけるように、本書の主眼は高校教育システムにおける包摂について定時制高校を事例として検討することにある。つまり、高校教育の領域に中学校を卒業したほとんどの人が取り込まれる状況になって以降、定時制高校ではどのようにして生徒を受け入れていったのかという点を明らかにすることを目指している。したがって、定時制高校についての知識も特段必要としない。教育学・教育社会学の領域で研究をされている方や定時制高校に興味をお持ちの方だけでなく、教育問題や教育の内外で生じる包摂／排除といったトピックに興味を持つ方がたにも幅広く読んでいただけたらとても幸いである。

定時制高校の教育社会学  
— 教育システムの境界と包摂 —

---

目次

<b>序章 研究の目的</b> .....	1
1. 問題の所在	1
2. 先行研究の検討	4
3. 課題の設定および分析の方針	9
3.1 「包摂のロジック」という視点	9
3.2 高校教育システムの「境界」への着目	12
4. 本書の構成	13
<b>第1章 定時制高校の布置</b> .....	17
1. 定時制高校の来歴	17
2. 定時制高校の構想と実情	20
2.1 定時制高校の発足	20
2.2 青少年教育機関における位置づけ	23
3. 定時制高校ニーズ低下の背後にあった社会状況の変化	26
3.1 経済状況の好転と全日制高校進学者増	26
3.2 序列化の原理および背景	29
4. 結論	31
<b>第2章 生徒の多様化と包摂の限界</b> .....	33
1. 問題設定	33
2. 不本意入学者の増加と職業高校の布置の変化	35
3. 分析に用いる資料について	37
4. 中退率の上昇を支えた論理	40
4.1 「不本意入学者」に対する教師の忌避感	40
4.2 退学をめぐる語り	43
4.2.1 退学問題への関心の高まり	43
4.2.2 退学を容認する論理	45

5. まとめと考察	50
-----------	----

### 第3章 「包摂のロジック」の転換 ..... 55

1. 問題設定	56
2. 本章の課題と分析の視点	59
3. 分析対象	61
4. いかにして定時制教師はミッションを再解釈してきたのか	63
4.1 「能力の低下」の問題化と経済的事情を抱える「あるべき定時制生徒」の減少	63
4.2 「あるべき定時制生徒」の消失とミッションの拡張	66
4.2.1 「学習意欲」という基準のゆらぎ	66
4.2.2 生徒の抱える「喪失状態」への注目と原因の探求	68
4.2.3 定時制教師の語りの背後にあるもの	71
4.3 あらゆる定時制生徒に向けたミッションの展望	73
5. まとめと考察	76

### 第4章 「包摂のロジック」の協働的構築 ..... 79

— 一定着を動機づけるメディアとしての生活体験発表記録誌 —

1. はじめに	79
2. 分析資料の選定とその特性	82
3. 分析の視点	84
4. 「包摂のロジック」の協働的構築	86
4.1 学歴獲得のチャンスとして意味づける語り	86
4.2 「青春」を経験するチャンスとして意味づける語り	88
4.3 オーセンティックな経験を得るチャンスとして意味づける語り	90
5. まとめと考察	93

第5章 オルタナティブな「包摂のロジック」の構築 ..... 99

—「アウトロー的」実践に正当性を付与する教員OBの語りに着目して—

1. 問題設定 99
2. 分析の視点 100
3. 分析に関わる基本的情報 102
4. 非排除的实践を可能にする論理 104
  - 4.1 定時制高校に必要な教育実践としての「だべり実践」 105
  - 4.2 差異化のリソースとしての「非エリート経験」 107
  - 4.3 定時制高校の社会的布置 111
    - 4.3.1 少年院と同列にある学校 111
    - 4.3.2 退学コンプレックスの予防 114
5. まとめと考察 116

終章 定時制高校と「包摂のロジック」

—知見の整理と考察— ..... 119

1. 本書の知見 119
2. 本書の学術的意義 121
3. 本書から浮上する新たな論点 123
4. 今後の課題 126

文献 129

あとがき 137

索引 141

初出一覧 145